

遙拝勤行の意味するもの

廣田 頼道

①二十年間丑寅勤行をして来て、遙拝勤行をして考えた事。

一九八六年十月一日より、私は、毎月の一日、七日、十三日、十五日の計四日間だけ、丑寅勤行をすることにしました。

一日の報恩は、現在では御経日と称して先祖の塔婆供養の為の日のように思われていますが、元旦一日に丑寅勤行をして新年を迎えるように、本因妙の信仰の志に立ち還って報恩の為に行うものだと思われま

七日は、開山第二祖日興上人の御報恩。

十三日は、宗祖大聖人の御報恩。

十五日は、第三祖日目上人の御報恩。

昔から、この四日間は、本山大石寺の塔中、満山の出仕出来る住職全てが、丑寅勤行に列席する衆会(しがい)として、現代まで続けられているのであ

ります。

毎日丑寅勤行をすることは、毎日の予定や、精神力、体力を考えれば、それは無理だと思ひ、せめてもこの四日間の富士門にとって大切な日だけは、報恩の為にやりたいと考えたわけであります。

加えて、私は、正信会という一つの組織も、常に大聖人の本因妙の信仰に立ち還ろうとする不断の精進をしない限り、何年かして行く内に、信徒の人数、勢力を中心に考える、覇権主義的な意識、方向に向かつて行くように思え、今一度、雑事雑念に流れやすい、朝夕の勤行ではなく、法門上大切な、丑寅の刻に勤行をし、どのような信仰の姿勢を大切にして行かなければいけないのか、御本尊様の前に、小さな自分をキチンと置いて、逃げることなく、自分を見つめ直そう、成道の刻に自分を置いて、考え直してみようと思つたのであります。

二つ目に、正しい相承の儀を経ずして、貫主を詐称している阿部日顕師に対して、「丑寅勤行をさぼっている、花見に浮かれて丑寅をしない」とかの色々な批判がされました。それでは、批判している者は、何をしているのかを考えなくてはいけません。

落ちついて考えると二七者の貫主が、さぼり乍ら、逃げ乍らでも、丑寅勤行をしている。二七の丑寅勤行、自分を本物に見せる為に丑寅勤行をしているのですからこれは大変奇怪なことであります。

昔から、丑寅勤行は、本寺（本山）の勤行だ、貫主の勤行だと、本山の中に閉塞された貫主の個人的な勤行のように言われて来ましたが、成道を期する勤行に、本山と貫主だけのとかいうことが、あろうはずがないわけでありますから、そういう考えはおかしいのであります。

阿部日顕師を否定するということは、こちらにも信仰の法門を修行の上に体現し、守っていかなければならない責務というものがあはずだと思ふのであります。

《丑寅勤行について考える『芝川11号』三七pより引用》

以前、この様に示したように、私が丑寅勤行を二十年余り前から始めて、現在まで行つて来た理由は、阿部日顕師が、なりたくて、なりたくて篡奪貫主になつたにもかかわらず色々本山から出掛ける用事をこしらえては丑寅勤行に精励しない姿を見聞して、

これはけしからんことだけれども、私自身何もせず、批判しているだけの姿も醜いものだと考えて、毎日励行することはスケジュール的に無理だろうから、せめて一ヶ月の内、四日間だけ行い丑寅勤行の大切さを身を持って感じてみようと思ひ立つたのが切っ掛けであります。

私個人の正直な心の有り様を告白すれば、小僧の時も大学を卒業して所化として在勤した時も、丑寅勤行はやらされている感覚の修行であつて、苦痛で苦痛で、小僧の時には丑寅勤行が終わつた後には、居眠りしていたと説教され、ビンタを張られ、今も心の中にトラウマとして焼き付いている暗い気持ちに満ちたもので、決して喜びを感じるものではありませんでした。にも関わらず、その丑寅勤行を日顕師の丑寅サボリを機縁に自分からやつてみようと思つて考えたのであります。この御陰で、私は初めて、丑寅勤行の意義を自分のこととして考えることが出来、本当良かったと感謝しています。

丑寅勤行をするようになってから現在迄二十一年間、自坊で実行することが出来る範囲ではあるけれども、出来るだけ丑寅の時刻を守つて行おうと考え

て、二十三世日啓上人の元禄元年の『留守定』という文書の、

一、一夜番者常の如く丑の下刻なり常番の表を相定めて勤べき也、

に準じて、丑の下刻（丑三つ時）二時二十分から丑寅勤行を始め、御題目を唱えながら、丑寅の刻の三時が経過していく様に心掛け、御題目を一時間行うようにした。現在、大石寺では二時三十分より行っているが、何を根拠にしているのだろうか。

正面の勤行が終わった後に、福山の地から東北に位置する戒壇の本尊の方角に向かって遙拝勤行をするようにしました。これは、元旦の勤行に於いても、信者さんと共に行つて来ました。しかし、やはりはじめて二年ほどは、丑寅勤行をする度に、私は戒壇の本尊に向かつているつもりだけれども、座る角度が少しでも違えば、戒壇本尊との長い距離の間に数え切れない神社仏閣が点在しているわけでありますから、どこに手を合わせているのか分からなくなってしまうのではないか。それでは遙拝の勤行をする意味が無くなってしまうのだろうか。という事を不安に思い縷々考え続けました。しかし、丑寅勤行を続け

て行くうちに、今日まで大石寺で続けられてきた遙拝勤行の形態と内容（法門）に大きな本質から外れた乖離が生じているのではないかと気付き、それ以後は先に述べたような不安を生じながら丑寅勤行（遙拝勤行）をすることは無くなったのであります。

自分の心の中では、この二十年程の間、この事を何とか文章にまとめたかと思いつつ続けてきたのですが、項目や文章を書いては止め、書いては止めて、無為に時間だけが流れた思いがします。しかし、たとえ稚拙な論でも、何かのヒントを提示することが出来れば、議論が未来にリレーされて行く機縁になるかもしれないと思ひ、幼児の疑問のような、根源的な、何故遙拝勤行があるのだろうか、遙拝勤行の意味するものは何なのだろうか、という点を中心にして述べたいと思ひます。

もとより、日常的に続けられてきた化儀には、ほとんど法門の裏付けとなる文献資料が伝わっていない為、文献を示して証明することは不可能ですけれども、日蓮大聖人の法門の筋道から、辻褃の合う点辻褃の合わない点を導き出して問題提議にしたいと思う次第であります。

②天拝（朝の勤行で東に身体を向けての勤行）も遙拝の勤行である。

日蓮正宗に於いては、一日に朝・夕2回の勤行を信仰者の基本的な修行、お勤めとして行います。その中で、朝の勤行の折りだけに天拝の勤行を行います（夕の勤行ではせず）。その勤行の観念文は諸天善神に南無妙法蓮華經の法味を捧げる意味・内容であります。本堂正面の本尊に向かつての勤行を後回しにして、天拝を優先するということは、諸天善神に今から法華經の行者として信心修行を行うので、諸天も参集し諸天の勤めである法華經守護を忘却してはならないぞとする、諸天覚醒の勤行であります。

当然、諸天善神は東だけに存在しているわけではありません。東西南北、天上天下、森羅万象、時間空間を問わず存在しているのであります。夕方の勤行の時刻にはいないというようなものではないにもかかわらず、朝だけ東天に向かうということは、星々の中心（諸天善神の中心・根本）である太陽（大日天王）が登ってくる日の出を中心のシンボルと考えて東天に向かうのであります。太陽の日の出の位置

は春夏秋冬で順々に移動します。しかし、日蓮正宗では、ただひたすら真東に向かつて天拝の勤行をするのであります。つまり、実際の太陽の具体的な位置には感心は無く、シンボル化した太陽を諸天の中心とイメージして遙拝しているのであります。ですから本堂東面に窓が有ろうが無かろうが、壁であろうが、何であろうが、日の出の時刻でなければいけないとかの拘りも感心も、まったく無いのであります。つまり距離・位置（方向）・時間を意識しない、心の内のシンボル・イメージを一応東天と定めて遙拝している勤行が天拝の勤行なのであります。丑寅の時刻も、太陽が昇るような時刻でない真夜中にも関わらず、イメージの世界において、天拝という遙拝をしているのであります。

※学生時代、手伝いで行った御寺の住職が、何かの悩み事で相談に来た御信者さんに、

「そんなに辛いんなら、丑寅勤行でもして、しっかりと御祈念しなきゃあ、良くならないよ。」

と言っていたのを聞いて、学生時代で、丑寅勤行の深い意味もまだ知らなかったけれども、小僧の時か

ら行つて来た体験の上から、丑寅勤行は、そんな願掛けの、御百度参りの様な勤行ではないと、異様な違和感を感じた。一部とはいえ、坊さんがこの程度の認識なのだから、話にならない。

※丑寅勤行は広宣流布御祈念の勤行だと表現するが、創価学会的、人数増殖の折伏観の広宣流布ならば、この表現は完全に間違っている。私は、それよりも根本的な「一切衆生成仏の勤行」と拝する。

※現在の大石寺の丑寅勤行の説明を読んでいたら、「法主の御衣の裾に御すがりして、させて頂くという勤行」と書いてあった。小僧の時には聞いた事もない表現だった。そんな隷属的な勤行って一体何の意味があるんでしよう。

③丑寅勤行の時だけ遙拝勤行をする意味。

遙拝勤行は実に不思議な勤行で、本山での丑寅勤行の時のみの勤行なのであります。他の如何なる時・場所においても行われぬ勤行であります。にもかかわらず、方便品・自我偈・題目の簡略な、サラッと確認だけのような、付け足しのような勤行なので

あります。しかし、丑寅勤行に欠かすことが出来ない勤行なるが故に今日まで行じ続けているのであります。という事は、遙拝勤行が丑寅勤行の法門的意味の本質を形成する意味内容を持つている事になります。

客殿本堂の中は正面の本尊に向かつて左に日蓮大聖人御影、右に日興上人御影。貫主導師台は左端で東に向け横向きに置かれ、本尊と向き合わない。過去の貫主が同席する時は右端で西に向け新旧貫主が向き合う形となる。この座配も他宗に類を見ないのであろうと思う。そして、遙拝所は本堂正面に向かつて左端に位置され、拝する本尊は無く、拝する先の延長線上に戒壇本尊が蔵されている様に必ず設計されているのであります。

客殿という名称の堂が建立されたのは、一四六五年第九世日有上人の時代であるため、法門を化儀に表すことに意義を込められた日有上人が今日の客殿の形態を定めたのであろうと推察出来るのであります。又、客殿の本尊は正応三年の讓座本尊（座替わり本尊）であるため、一四六五年以前にも客殿とは称しないものの、それに準ずる意義を有する。堂の

存在があり、讓座本尊が安置されていたと推し量ることが出来るのであります。

旧木造客殿も、昭和三十八年に建立された鉄筋コンクリートの大客殿も現在の和風鉄筋コンクリートの客殿も御寶藏・奉安殿・正本堂・奉安堂と戒壇本尊の安置される場所と名称が変わつても、常に戒壇本尊の位置から逆算して客殿の遙拝所の位置形状を考え建築しなければならぬのであります。客殿単独で自由に建築することが出来ない一体のものなのであります。

昭和三十八年に落成した大客殿の前身の旧の木造客殿の遙拝所は、御寶藏に向かつて障子戸が建て付けられていて、遙拝勤行の時だけ、開け放たれる状態にされていた。この時代を体験された方に聞くと、寒風や横殴りの雨の時には客殿全体に吹き込んで、寒くて、吹きっ晒しで大変だったと、言われる。昭和三十八年落成の大客殿はガラスをはめ殺しにして、開け閉めの出来ない形状にしてしまった。この様にしてまで表現される化儀とは、ただ単に丑寅の刻限に導師はじめ参拝者が御寶藏に移動し、鍵を開け、直拝する事が面倒臭いから、辛うじて形式のみを簡

略に残して、遙拝を行っているとすれば、戒壇本尊と客殿の関係と、唯一、丑寅勤行の時のみに遙拝勤行が行われるという特異な形態の説明の内容としては、無意味であり、大がかりな割には、中味が無いという話になつてしまふ。直拝（形を拝む）で無く、遙拝（心を拝む）だからこそ意味があるのではないか。むしろ、直拝を拒否し、遙拝に法門のあるべき姿を託したと考えるべきなのであります。

師弟が合い寄つて和合する客殿の奥に戒壇の本尊を御安置する。師弟合い寄つた、不二の心にこそ、真の本尊がまします、師の己心にも、弟子の己心にも、師弟一箇の本因にも南無妙法蓮華經の法がまします、師弟一箇の奥にしか、真の本尊は存在しえない。このことを化儀に託しているのであります。

※正面の御本尊に五座の勤行をし、次に導師が座を移して遙拝所での勤行をし、ここで一般の信者さんは丑寅勤行参加が終了。僧侶は次に、大坊の持仏堂である、六壺で遙拝所の勤行と同じ方便品、自我偈、題目の簡略な勤行で終了。これが貫主の朝夕まとめた勤行であつて、住まいである大奥で朝夕の勤行を

個人的に行ずる事はしない。もちろん、一日に五回六回と御経を唱えることも日常的にあるわけだから、その事を非難することは必要ないと思います。

※鳥取県東伯郡三朝町に天台宗の三徳山三仏寺という寺院があります。創建は(伝)嘉祥二年(849年)開基(伝)慈覚大師円仁、と言われています。開山は慶雲三年(706年)役行者が修験道の行場として開いたとされ、後に慈覚大師円仁が本尊を釈迦如来・阿弥陀如来・大日如来の三仏を安置したと伝えられているのであります。

天台・真言・念仏・禅宗、何でもありの天台宗らしい、三仏寺という寺名にふさわしい、三つどれか信じれば、何かに助けて貰えるだろうといった、根本尊敬こそが本尊であるにもかかわらず、根本の定まらない、日本の宗教観丸出しの御寺であります。

この御寺の中心が国宝に指定されている、奥院である「投入堂」であります。修験道の開祖、役小角が、その法力で建物ごと平地から投げ入れたという伝承が語り継がれ「投入堂」の名称はこの伝説に由来しているのであります。

まさしく垂直に切り立った岩山の絶壁の窪みに、いつずり落ちてもおかしくない、何故納まつているのだろうと思える姿で建っているのであります。

平安時代末期迄時代が遡れることと、珍しい形状の建築物ということもあつて国宝に指定されたのだろうが、その教義は先に書いたように魑魅魍魎であります。この「投入堂」は先に書いたように、山岳信仰と深く関連している為、修験者の行場としての険しさがある為、「投入堂」へ直接近づき拝むということは老齢病弱の者では叶わない事なのであります。その為、麓の車道から「投入堂」を仰ぎ見る事の出来る場所があり、看板が「投入堂遙拝所」とあり、小さな屋根と、線香・ロウソクを供える事の出来る様な小机と一体化した、街角の掲示板を大きくした様な物がしつらえてあるのであります。

『ウィキペディア』参照

私は一度、ここに立ち寄った折りに、寺域全体とこの遙拝所を見て、「ああ、遙拝所つてここにもあるんだ」と思わず口走ってしまった。

戦時中であれば現人神である天皇の住まわれる「宮城」遙拝とか全国の各学校であれば「御真影」

「教育勅語謄本」等を奉安する為に校庭敷地内に作られた「奉安殿」遙拝。全国の神社仏閣には、まだ「遙拝所」という物が存在するのかもしれないが、私の狭い知識の範囲では過去の歴史にあった「宮城遙拝」と「奉安殿遙拝」そして、直接見た「投入堂遙拝所」だけであります。

しかし、これらの遙拝は、直拝すべきところではあるけれども、出来ないのです。遙拝もしくは恐れ多いので、という遙拝なのであります。

この様に、同じ「遙拝」という文言に出会った時、明らかに日蓮正宗の遙拝という意味・内容と違う違和感を感じるのであります。その違和感の一番の原因は、客殿に於いてのみの遙拝という性格と、遠いから、険しいから、恐れ多いからという遙拝では、まったく源が違うということなのであります。

しかし、現在の日蓮正宗は「投入堂遙拝所」や「宮城遙拝」「奉安殿遙拝」の遙拝と同様の直拝に直結したものに、自ら成り下がってしまったと言わざるを得ない状態と認識なのであります。

④丑寅勤行（師第一箇）と遙拝勤行。

丑寅勤行は貫主の勤行だとそらとぼける人間がいる。しかし、何故そのように言えるのか理論立てて明らかに論文に示した者は今迄にいない。

むしろ、丑寅勤行に於いて無意識に営々と続けてきた所作が、客殿で行われる事、貫主一人の勤行でなく、師弟合い寄つての師弟一箇の勤行であることを証明しているのであります。まず、本山で出家得度する者は、出家得度式自体は昼間六壺で行われる。そして、その晩から未明に行われる丑寅勤行に出家者全員参列するのである。中学に進学してすぐに行われる衣免許も丑寅勤行の中で貫主が一枚一枚衣を肩に羽織つてから一人一人に着せられていく、袈裟免許も同様である。新説免許も出家得度と同じく新説免許後の未明の丑寅勤行に全員参列するのであります。まさしく、師弟一箇を強く認識する節目節目には必ず丑寅勤行が要の鍵として存在しているのであります。しかし、この師弟は、当然の如く、上下関係の師が弟子を威圧する師弟でなく、弟子が一人前になっていくことを認め、見守る、引き立てていく、弟子の己心の仏界を尊重する師弟一箇の存在と

言える形なのであります。そうでなければ、貫主が忙しげに弟子全員の衣や袈裟を滑稽に見えるほど着ぶくれしてまで一人一人に渡す化儀が存在する筈がないのであります。

※日蓮大聖人の法は「師弟一箇」「師弟の法門」と表現されます。この事と、僧侶として出家する際の師匠を同等のように論じられるのでありますが、果たして、そうなのだろうかと感じる点があります。

学生、所化、義務教育（教師になる迄の期間）迄に出家時の師匠が亡くなった時には、次の師匠を捜して、譲り弟子となることが絶対条件となります。しかし、一人前の教師となつてから、師匠が亡くなつても、新たに師匠を捜し求め定める必要はないのであります。形式的には糸の切れたタコの状態で、直接叱ってくれる人もいない状態で自分で研鑽し、教えを他に求め彷徨わなければならぬ状態になります。一人前の教師とは名ばかりで、当然法門の全般に精通している人など、誰もいません。「師弟一箇」「師弟の法門」ならば、亡くなるまで師匠が必要な筈であります。現実には教師になる迄の身元引受保証人という意味が濃く、法門上の「師弟」とは違ふ

意味があります。

僧侶の世界の現実が昔からこうであるにもかかわらず、一部の僧侶（住職）において、御信者さんに盛んに「自分が手続きの師匠だ」という事を言い、言うことを聞かなければ成仏出来ない。自分の言うことだけ聞いている、他の僧侶の話は聴かなくて良いと言わんばかりの人がいます。日蓮大聖人が折伏して、種から育て、御書に名を連ねるような南条時光・四条金吾・池上兄弟等々の師弟と自分達を同等に錯覚していて良いのだろうかと疑問に感じます。これでは大石寺の貫主本仏論と同じ住職本仏論を展開しているだけなのであります。私達が今実行しなければいけない「師弟の法門」とは、不完全な荒凡夫の師弟が信心精進に力を合わせて、日蓮大聖人、日興上人、日目上人と御在世当時の御信者さんが展開した「師弟一箇」「師弟の法門」を手本として、誠めとして、真実の法を探し求めて、成仏を目指すということが、滅後、今日の本当の「師弟一箇」だと感じるのであります。坊さん自身が「戒壇本尊絶対」「貫主本仏論」迷っていた時代の事を考えれば、坊さんだから師匠で正しくて、絶対で、完全無欠の

無謬だと振る舞う事自体が間違いであります。

※創価学会も盛んに【師弟】を強調していますが、「戸田先生を一人で守ったのは私だ」「師の為に生命を掛ける弟子の覚悟が大切だ」等と子供の戦争ごつこの大将と雑兵、ヤクザの親分子分の関係と同じ類のものを【師弟】と、すり替えて言っているだけで、日蓮大聖人の示される師弟などではないのであります。

※創価学会が主張する、狂える師弟不二の源は池田大作著「人間革命」に織り込められています。この「人間革命」の師弟観を「謗法の書 人間革命」と言う本に詳細に破折しました。三寶院のホームページ（<http://Its.geocities.yahoo.co.jp/g1/kjisy4a/>）してありますので一読下やう。

⑤未だ全世界に妙法が廣宣布されぬ迄は蔵の形式をとる。

戒壇の本尊は原則として秘蔵の形を守る為、密を供えない。秘蔵の為、拝する行為は御受戒を受けた入信者だけに御目通りを特別に赦す内拝と呼ぶ。廣宣布の暁には密を供え、一般の御堂や末寺の本尊

のように扉を開け放ち、入信、未入信の差別、区別無く公開するとの言い伝え。しかし、密は遙拝所には供えてあるわけでありますから。本来は、華・香・水の供養を未だ廣宣布せざる間はしないという内容が変質して伝わったのであろう。つまり、密を供えないという言い伝えは間違いなのであります。

奉安殿、正本堂、奉安堂を一般社会の人々が見て、蔵と受け止める人がいるでしょうか。一〇〇％いないでしょう。蔵でない物を蔵と言い、内拝で無いものを内拝と言い、華香水を供えていないだけで、どの御堂よりも莊嚴にしていることは、見せ物の様に公開している事と同じなのであります。創価学会と公明党の、政教一致でありながら政教分離と言っている、噴飯ものの、頭隠して尻隠さず状態と同じであり、法門の本質をねじ曲げる矛盾を産み、かつ信仰を間違った方向へ導くだけなのであります。

⑥師弟共、己心の仏界を拝し合う事を意味し示しているのが遙拝勤行である。

日蓮大聖人御図顕の本尊は、一切衆生の己心の仏界を示したものであります。生命・心を写す明鏡で

あります。

此れは釈迦、多宝、十方の諸仏の未来日本国、当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし。

開目抄 全二二三 p

加えて、森羅万象・三千世界をうつす鏡であることから、観心の本尊と示されるのであります。日蓮大聖人御凶顕の本尊以外の真言宗、禅宗、浄土宗、等々が掲げる本尊は完全無欠の汚い心など無い綺麗事の金ピカの仏の姿であります。しかし、十界互具の曼荼羅には、殺人鬼の提婆達多や鬼子母神迄が認められているのであります。これらの地獄・餓鬼・畜生・修羅の、自分でも眼をそむけたくなる様な汚らしい生命に向き合い、そんな生命も一切衆生に平等に存在している。しかし、そんな生命を持つていると同時に、根本に南無妙法蓮華経の仏と同じ生命も平等に持っている。だから、十界の生命を持ったまま、その醜い生命を退治し迷いを断ち切らなくても、迷いを持ったまま、誰もが差別・区別無く成仏出来る資質を具えているんだ。妙法に逆縁する事によつても必ず成仏することが出来る。しかし、天台の本覚思想の様に仏性を持つているから、何をして

ても救われるというものではなく、法華経の行者として信仰に生きる信心の姿こそが成仏なのであります。まさしく、一切衆生の生命とはこうなっているんだよ、と、鏡のように生命を写し伝えてくれる存在なのであります。だからこそ、在世・正法時代・像法時代・末法時代、仏が中心で無く、法が中心の未曾有の大曼荼羅なのであります。

加えて、この十界互具の曼荼羅は、

口決に云く「草にも木にも成る仏なり」云云、この意は草木にも成り給へる壽量品の釈尊なり、

草木成仏口決（全集一三三九 p）

と、唯、単に本尊を作る媒体（材料）としての草（紙）木ではなく、草木成仏の証としての意味を示しているのであります。その上に、

観門の難信難解は百界千如一念三千、非情の上の色心の二法十如是是なり、爾りと雖も木画の二像に於ては外典内典共に之を許して本尊と為す其の義に於ては天台一家より出でたり、草木の上に色心の因果を置かずんば木画の像を本尊に恃み奉ること無益なり

観心本尊抄（全二三九 p）

色心の因果、過去・現在・未来の永遠常住の十界の生命・心そのものを写し置く本尊であることを明示しているのであります。そして、一切衆生、全ての十界の生命の根本に一切の仏と平等に南無妙法蓮華經の生命が具わる、これが、己心の仏界なのであります。

草木成仏の証として「草にも木にもなる仏」ではありませんが、本尊(法)は、草や木に限定された物ではないのであります。又、横何cm、縦何cm、厚さ何cmの体積空間に限定された物でもないのであります。何億万体の御本尊が世界中にあつたとしても、何億万の法が世の中に存在しているのではなく、法は全体であり、一つなのであります。

「草の上に置かれた因果」とは、法を一切衆生に伝える媒体は、文字と言葉しか存在しない。言葉は発せられると同時に消滅する。ならば、草木のうえに墨をもつて強いて顕さざるを得ない唯一の方法によつて顕され、伝えられた【法】だったのであります。

※観心本尊抄(全三三八頁)冒頭に【摩訶止観第五】を引用され「此の三千・一念の心に在り若し心無ん

ば而已介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議境と為す意此に在り」と、明示される。ここに示される「介爾」とは、眼に見えないほど微細な空中を舞う塵ほどの存在ということであり、現代の科学的認識で理解されている段階で言えば、原子・原子核・陽子・中性子・中間子・クォークの南無妙法蓮華經とそこに書き表すことの出来ない、超素粒子の存在にも南無妙法蓮華經の法は見えずとも宿るということでもあります。つまり、南無妙法蓮華經の法は南無妙法蓮華經と見える事の出来ない、認識することの出来ない世界にも厳然と存在する南無妙法蓮華經ということになります。

日蓮大聖人は人間界の五感を持つている衆生に対する慈悲として南無妙法蓮華經を主題とした本尊を未曾有として顕してくれましたのであります。でも、南無妙法蓮華經は、空気や水のように、何物にも変幻自在に変化し、南無妙法蓮華經の文字だけをもち、南無妙法蓮華經の法全体を示すものではないのであります。法とはそういう存在であり、道理なのであります。譬えば、眼の前にある鉄の塊を自分の所有物だと主張しても、原子・原子核・陽子・中性子・

中間子・クォークまで、原始を極めていけば、鉄の本質は鉄の特性に束縛され、限定されたものではなく、全ての生命に共通、共有される平等の存在の法となり、鉄の本質も、人間の本質も、他の生命の本質も同質の世界に至るのであります。個人が自他を主張することさえむなし世界なのであります。法界万靈全ての生命に自由に行き交い、支え合い、無関係の無い、一念三千無妙法蓮華經の世界なのであります。

現代科学の、ここまでは物質で、ここからは心(精神が宿る)が始まる、というようなものではなく、始めから終わりまで色心不二・一念三千なのであります。

科学者がどれほど原始を求めても、無始無終の法の中の見果てぬ迷いの旅になるはずであります。しかし、凡夫の迷いと同じで、その迷いの中で、生命の不思議さ、尊さを見出していく色心不二・一念三千の旅にもなるはずであります。

こうして示された元初となる【法】こそが、己心の仏界であります。この己心の仏界を尊敬し合い、認め合い、信じ合い、押し合う信心こそが日蓮大聖

人の示された法であり、日興門流に引き継がれた法門であります。

御互いの己心の仏界を、尊敬し合う、認め合う、信じ合う、押し合う、差別・区別の無い絶対平等の全ての生命の本因という源が同じであつてこそ一切衆生の成仏が可能となる。廣宣流布〓一切衆生成仏のあるべき姿とは、こういう事なのであります。

常不輕菩薩の二十四文字の經文

我深く汝等を敬う敢えて輕慢せず所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて当に作仏することを得べしと。

は、まさしく、この事を示しているのであります。

このことが日蓮大聖人の生涯で宗旨として明確に師弟確認し合うことが出来たのが、熱原の法難であります。日蓮大聖人と人生も修行も学問も違う、入信して歳浅い熱原の農民が、直々に日蓮大聖人に合い、信仰の要諦を手取り足取り順々と学ぶこともなく、日興上人によつて間接的に日蓮大聖人の生涯と法門を伝え聞いたにもかかわらず、日蓮大聖人が龍の口で、発迹顕本し末法の本仏の自覚を持たれた、その法華經の行者としての同じ妙法の覚悟を貫かれ、

同根の志を示されたのであります。この事が戒壇本尊の建立の機縁となり、戒壇本尊の中味、日蓮正宗の宗旨が日蓮大聖人の出世の本懐として建立されたのであります。つまり、師弟共々に一箇となつて、平等に互いの南無妙法蓮華經の仏性を拝み合う姿がそこに顕れたのであります。自分の心だけを観る観心だけでなく、他の生命の己心の仏界をも観る観心。これこそが日蓮正宗の信仰の元初であり、一切衆生成仏の本因なのであります。

観心本尊抄送状(全二五五頁)の中に於いてさえ、「仏滅後二千二百二十余年未だ此の書の心有らず」と、佐渡期より本尊を顕し始めたにもかかわらず、「心有らず」完全でないと示される。では、何を以て完全なのか、本懐なのかと言えば、弘安二年十月一日の聖人御難事(全一一八九頁)に「余は二十七年なり」と、一連の熱原法難の渦中において、出世の本懐として、師弟一箇の場面を機縁として示されているのであります。師弟一箇とは言い換えれば、まさしく、師の本懐、大願とは一切衆生成仏の事であります。凡夫の弟子(一切衆生)にも、仏性の開示悟入の自覚が出来る正法に縁させ、一切衆生成仏

こそが大願である事に弟子(一切衆生)を目覚めさせ、貫かせる事、同心の妙法によつて一箇し、一切衆生成仏の確信を事実として認識する事が出世の本懐であり、日蓮大聖人の宗旨であります。

※御本尊は私達の生命を写す鏡であります。私達人間以外の生命も含む、法界全ての一切衆生の生命とは、こうなっているんだよ、地獄、餓鬼、畜生、修羅等の穢れた九界の生命にまみれているにもかかわらず、その根本、柱には仏と平等の南無妙法蓮華經の生命が厳然と具わり、九界の生命を引きずつたままでも、一念三千の法を信じ生きる事によつて、成仏出来ない生命はないんだということを示してくれているのが御本尊であります。鏡として写しているということは、写されている自分達の生命が本体である、一念三千の生命そのものであり、鏡は仮であります。しかし、ただの仮ではなく、この鏡が無ければ、一念三千の生命を我々は覚知することが出来ません。一般社会においても、もし鏡が世の中に存在しなかつたら、私達は、自分がどういふ顔をしているか、他人が知っているのに、自分は知らないで

人生を終えることになります。故に、仮の鏡と雖も、単なる仮物などでは無く、未曾有の一切衆生にとつて必要不可欠の鏡なのであります。生命を正しく写さない鏡（釈尊・阿弥陀如来・大日如来・薬師如来・観音・弥勒等々にすがりつき、救つてください、守つてくださいと、どれほど信じ祈つても、それらの仏菩薩の根本の法が何かも分からないし、私達の生命の本質も写らないのであります。）も、世の中には蔓延しているのであります。十界互具一念三千の生命を有るがままに写す鏡は日蓮大聖人が示された御本尊しかないのであります。加えて、師弟一箇することの出来る一念三千の生命を写すことの出来る唯一の鏡なのであります。鏡に写つた南無妙法蓮華經を遙拝しているのです。これは、自分でもありませんが、固有のものではなく、一切森羅万象の生命の全体、自他を超えた共有、平等の法なのであります。

※仏法に縁することを【下種】という為に、仏から初めて仏種を授けられて、成仏するかのように理解している人がほとんどですが、【開示悟入】で分か

るように、元もと具わっている仏性に、目覚める機縁を【下種】と表現しているのであります。

※【本已有善】【本未有善】の解釈も、ほとんどの人が混乱しています。末法の衆生は【本未有善】だからと言いますが、法を根源にせず、釈尊を根源とする植え手として、釈尊より妙法下種を授かるという図式の、在世・正法・像法時代の構図から、末法は本因の法を根源にし、釈尊を脇士とし、根源の法は一切衆生に元来具わる、しかし、正法に縁しない限り、具わつても具わつていないことに目覚めることが出来なければ、具わつていないこととなつてしまう。故に正法に縁する事を【下種】と表現するのであります。コロンプスの卵の様に構図が変わっているにもかかわらず、釈尊を主体とする【本已有善】【本未有善】の物差しで計ろうとしていることは、法門が整理されていない混乱の極みであります。

出世の本懐とは、言い換えれば、仏がこの世の中に生まれてきた一番の目的を完遂させたということでありませう。どの仏でも本懐は一切衆生成仏なので

あります。日蓮大聖人が出世の本懐と弘安二年十月一日に示されるといふ事は、末法の本仏としての、目標（理想・希望）と目的（現実・実行）が一致したこの時点で一切衆生成仏の確信と確認をされたといふことなのであります。逆に言えば、仏だけの一方的な判断と、一切衆生不在で出世の本懐は成立しないのであります。

熱原法難を機縁として示された戒壇本尊。戒壇本尊を以て一切衆生に伝えようとした戒壇本尊の美味は、熱原法難によって示された師弟一箇の法門であり、この法門を大石寺の宗旨として姿にしめされている化儀が遙拝勤行なのであります。

戒壇本尊という物体が本懐でなく、熱原法難によって確認された、師弟一箇して人法一箇の同心の妙法を感得し一切衆生成仏の確信を認識した。これが本懐・宗旨なのであります。故に戒壇本尊が成住壞空の道理の中で朽ち果てても、地球の寿命と共に消滅したとしたとしても、「消滅しないと考えるのが信心だ。」「本尊が無くなったら、法も無くなる。」と強弁せずとも、日蓮大聖人の本懐・宗旨は永遠不滅不変なのであります。

※常不輕菩薩の物語は逆縁の衆生が地獄に墮ち、やがて成仏を遂げる（涅槃經にて）という逆縁成仏に主眼を置いた物語の為、常不輕菩薩に賛同する衆生の存在は出て来ませんが、もし二十四文字の經文と共に合掌礼拝された事に共感する衆生がいたとすれば、その衆生は、常不輕菩薩と合わせ鏡のように、二十四文字と同文を唱え、互いに合掌礼拝するのみと考えます。それは常不輕菩薩が会おう人々を拝んでいるように見えて、実はその人の己心の仏界を拝していたのであるから、共感する衆生も常不輕菩薩の己心の仏界に合掌礼拝するのみと考えるのであります。

⑦戒壇本尊を秘藏するだけでは本来の法門に帰る事は出来ない。

戒壇本尊は元來秘藏された本尊であるから秘藏して遙拝勤行の形に戻せば良いという意見があります。が、秘藏しても、その意味する所が何かが分かっているなければ、長野の善光寺、浅草の浅草寺を始めとする全国に散見する秘仏の類と何ら変わらない見

せ物になつてしまいます。何の意味もなく、勿体ぶつて、希少価値を高め、観光気分を高揚させるだけで

眞実の信仰、成仏に通じる教えを示すことにはならないのであります。何故、秘蔵の本尊なのか、それは、私達が見せたくても見せることの出来ない心と同じで、己心の仏界を示した本尊は、形として肉眼に見えれば、凡夫は必ず心の外に偶像としての本尊を求め、自分の願い事を叶える為の対象物としての本尊と考え、現世利益の信心に走り、己心の仏界を拝する信仰が出来なくなつてしまふ。だから日蓮大聖人の信仰は戒壇の本尊だけが遙拝では無く、直拝している本尊も全て遙拝の信心をもつて、己心の仏界を拝する信仰なのだということを伝えてくれるのが戒壇の本尊を拝する本当の意味なのであります。戒壇の本尊だけが遙拝で、あとは直拝で良いというのではなく、全てが遙拝の信心、己心の仏界にこそ、本因妙の法が存在することを、示し伝えている法門なのであります。秘蔵するだけでは何も改善されないのであります。本尊が何を機縁として顕され、何を一切衆生に伝えているのかという本尊の中味、心を拝する遙拝の信心を伝え、実行しなければ、何も蘇

生しないし、眞の法華經の行者を目指しているとは言えないのであります。

御影堂はその名の通り日蓮大聖人の生きていた時代の在世を表している御堂であります。客殿はその名の通り日蓮大聖人が亡くなられた後の滅後を表している客分（一切衆生）に主体を置いた御堂であります。つまり、客分の一切衆生と師が互いに向き合

一箇する。貫主、隠尊貫主が中に向き合い、本尊と信徒が向き合った師弟一箇を見守り、確認するのであります。

日蓮（左）、日興（右）、日目（左）『一閻浮提の御座主』の貫主席にあつて、見守る責任をまつとうしなければいけない、日蓮大聖人はどこまでも日蓮大聖人だけであつて、誰も日蓮大聖人の生まれ変わ

りでも、今日蓮がいるわけがないのであります。

大石寺では、間近に見える、近過ぎる御宝蔵、奉安殿の戒壇本尊安置の場所が直接見える距離で遙拝の勤行を長年してきた為、形のみに流され遙拝の勤行が何を意味しているものなのかという事が、忘却されてしまい、その意味を発掘する気持ちも終ぞ亡くなつてしまつたのであります。

大石寺には戒壇本尊が御安置されているからこそ、正しい法がある。正統である。と、彼等は議論を拒否して血を吐くほど、それだけを言い続けます。

戒壇本尊が御安置されていても、熱原法難の師弟一箇の宗旨と信心の志は大石寺のどこにも存在しないのであります。未だに建長五年四月二十八日が身延日蓮宗と同様に宗旨建立だと思ひ込んでいる人が沢山存在し、日蓮正宗の宗旨がどこに有るか理解出来ていない人がいます。遙拝の勤行はしていても、己心の仏界を平等に尊敬し、信じ合い、認め合い、拝し合う一切衆生成仏の信心の志はどこに有るのでしようか。

私は昭和三十八年三月二十八日出家し、今日迄生きてきた中で、大石寺大坊での小僧時代の中で、私も悪い事ばかりやっていたので、沢山怒られ、説教され、一時間二時間とコンクリートの床に正座させられたり、ゲンコツ、ビンタを受けてきた。しかし、振り返って考えるに、そういう折りの説教の中に、不軽菩薩の「相手の仏性を認め尊敬する、法華経の行者（菩薩）として成仏する」という教えが流れている事を感じた事が無いのであります。先輩後輩、

年功序列の、たとえ一日でも出家が早く、年下でも先輩の言う事は絶対であり、言う事を聞け、先輩に逆らうな。という理屈が全ての基本でした。世間の兄弟の序列よりも頑なで、一年違えば、まるで五年、十年の隔たりがあり、人格も経験も格段に違うような感覚なのであります。冗談とも本気とも取れるように、「天皇とゴミ」と表現する者もいる始末なのであります。勿論、人間的に人格、行体の優れた方も沢山いました。そういう方が一方にいてくれた御陰で、私のような人間でも、今迄やってこれたのだと感謝しています。しかし、先輩という特権だけを感情の赴くまま振り回すキレる人間が沢山いました。仏法の為や成仏の為や後輩の成長の為ではなく、自分の感情のはけ口として、後輩を反論出来ない、身動き出来ない雪隠状態にしておいて粘質的なイジメリンチを説教の名を借りてするだけの、人には厳しく、自分には甘い人間組織なのであります。「依法不依人」の基本も組織の為には邪魔なものでしかないのであります。しかし、これは軍隊式教育を取り入れた創価学会にしても同様であります。閉鎖された軍隊系、体育会系、の社会は、上層に甘く墮落の

温床になり、下層に厳しいリンチ体質に必ず帰着するのであります。その組織の根本となる教義、理念、信条が明確に掲げられ、大人から子供まで、誰が見ても、矛盾している事が一目瞭然の組織。先輩後輩、年功序列の単純なマニュアルよりも大切なものがあることを、全体が認識出来る組織でなければ、信仰の団体とは言えないのであります。

このようなマニュアルにいつ頃からなつてしまつたのか分かりませんが、この延長線上に貫主本仏論という、不輕菩薩の法門を否定する、真逆の組織を守るのに安樂な先輩後輩、年功序列の最たるピラミッド型の組織を強固と思ひ込み保守する為に不輕菩薩の法門は完全に遠い昔の早い段階で失われてしまつたのであります。そして言葉だけの、「我々の子供達の中に日目上人の生まれ変わりがいる。」等という、日目上人が育つ土壤作りもされていけないのに、綺麗事だけを言い続けているのであります。どれほど日目上人の生まれ変わりが出て来ても、芽を摘まれポロポロにされるだけであります。

貫主だけが選ばれし仏で、貫主の認可で、法の正邪、衆生の成仏不成仏が決定するという教義ならば、

十界互具・悉有仏性の法華經の教え、不輕菩薩という法華經の行者の手本、日蓮大聖人の教えと、どの様に矛盾せず会通するのでしょうか。

誰も、細井日達師や阿部日顕師や早瀬日如師を現代の日蓮大聖人などと信じている人などいないのであります。細井日達師や阿部日顕師や早瀬日如師を日蓮大聖人にしておいたほうが、自分達の權威、存在に便利だから、そういう事になっているのであります。つまり、祭り上げられた御神輿にされているだけなのであります。文字通り御神輿ですから、日蓮正宗の教義等というもので無く、単なる自分達の組織の御都合主義から生み出された外道の理屈ではないのであります。日蓮大聖人の一切衆生成仏の法と言ひ難い外道の屁理屈なのであります。

⑧ 結《戒壇本尊が何故根本であり、一番大切な本尊と言つのか。》

大石寺では、「戒壇本尊さえあれば、日蓮正宗、大石寺は安泰だ。」

このように言い伝えてきた。じゃあ何故そうなるのか、という理由を明確に説明し、その理由・心を

世の中に折伏すべきであるにもかかわらず、まったくしようとしなさい。私は彼等はその理由が分かつてないから出来ないのだろうと思う。戒壇本尊さえあれば、あとの理屈はいらないという、根性論、感情論を信仰と考えているのであります。

形のあるものは必ず無くなる。これは絶対の真理・道理であり、仏教においても全ての教えの前提として認めている道理であります。しかし、大石寺の人々は「戒壇本尊は無くならないんだ、無くならないと信じるのが信心だ。」と言ひ張るのであります。全ての生命には【成・住・壊・空】が有ると説きながら、戒壇本尊だけは圏外で永遠だと主張する暴論。我々が住んでいる地球にも【壊・空】の時代が必ず来る。地球が無くなつても、戒壇本尊だけは無くならない、ロケットで他の惑星に戒壇本尊を運んでと、イタチごつこのような選択肢を主張する人間も出てくるだろう。しかし、【壊・空】の道理から、他の惑星に移そうが、逃れる術は無いのであります。日蓮正宗、大石寺安泰の為に戒壇本尊という權益にしがみつiki悪用している体質なのであります。

今迄論じて来たように、戒壇本尊は、熱原法難を

契機にして師弟合い寄つて確認された、師弟不二、一切衆生成仏の確認を出世の本懐として建立された本尊であります。今日の大石寺の人々は、この法魂と本尊の姿形を限りなく別々の物と考え、姿形にしがみ付き、法魂を見失ひ、姿形こそ法魂と強弁し、姿形の源が何かを忘却している、心無しの状態であります。色・心に譬えを借りれば、色こそ生命だと主張している愚かさなのであります。

戒壇本尊その物が久遠元初・本因妙・一念三千の法なのでは無いのであります。久遠元初・本因妙・一念三千の法が一切衆生成仏の法であることを、一念三千を識らざる一切衆生には仏が大慈悲を起し、妙法蓮華經の五字の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けさせしめ給う手段として、強いて顕されたのが戒壇本尊なのであります。

表しがたい、掴んで示す事の出来ない人間の心を、言葉や、行動や、心という字で強いて表しながら生きてゐる、現実社会と同様なのであります。

出世の本懐たる法魂から本尊の姿形が生まれ、本尊の姿形を通して法魂を遙拝することによつて不二となる。これが信心の肝要なのであります。

一切衆生悉有仏性と、貫主だけが仏という、真逆な矛盾から、僧俗の立場を超越して一人一人の信仰者が一日も早く覚醒し、脱却する勇氣を持つて頂きたいと願う。

我々が帰るべき境地は、戒壇本尊の存在する大石寺という有形の場所ではなく、熱原の法難を機縁として、戒壇本尊に顕わし、一切衆生に成仏道を伝えようと考えた、己心の仏界である、久遠元初・本因妙・一念三千の正法を師弟一箇、合い寄つて開示悟入する、法魂そのものが戒壇本尊の故郷なのであります。

戒壇本尊・末寺本尊・真筆・形木と本尊に階級があるかのように、全ては戒壇本尊の写しであり、一番目の写し、二番目の写し、三番目の写しが有るかのように発言する輩がいる。自宅の本尊にお詣りしているだけではいけない、お寺の本尊を拝まなければ功德がない、御寺の本尊だけにお詣りしてはいけない、登山をして、戒壇本尊にお詣りしなければ成仏出来無い。結果、戒壇本尊が一番功德のある、効き目の強い本尊なんだ、という考え方が、何の疑問も無しに、されてしまうのであります。本尊に階

級があるはずがないのであります。

久遠元初・本因妙・一念三千の正法に階級が有るだろうか。有るはずがないのであります。

（以下は非常に薄い文字で印刷された、ほとんど不可読な文字列が並んでいる。これは本文の影写または複製の誤りと思われる。）